

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	魯迅と楊銓 : 中国民権保障同盟をめぐる人々 その1
Author(s)	吉川, 榮一
Citation	文学部論叢, 43: 77-97
Issue date	1994-02-28
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/2732
Right	

魯迅と楊銓

一 中国民権保障同盟をめぐる人々 その1 一

吉川 榮 一

はじめに

『魯迅』と題された一冊の写真集の中に⁽¹⁾、およそ不釣合な身なりをした二人の人物が一緒に収まった一枚の記念写真がある。ボサボサ頭で、セーターの上から質素な綿入れの中国式長衣を着ているのは魯迅。髪をオールバックになでつけ、ネクタイに三揃いのスーツ、そしてその上に毛皮の襟の付いた洒落たダブルのオーバーをまとっているのは楊銓という人物である。この写真が撮影された1933年2月当時、魯迅は51歳、楊銓は39歳である。この二人は、年齢が隔たっていただけでなく、経歴も生活様式も大きく異なり、思想的にもかなりの隔たりがあった。改めて言うまでもなく、魯迅は作家評論家として当時すでに一級の人物ではあったが、外国映画を時折見に行くのが唯一の贅沢といえるような比較的質素な生活を送りながら、寸鉄人を刺す評論・雑文を書き続けていた。一方の楊銓は、後述するように若くしてアメリカ留学を経験し、少壮の学者・行政官としてのキャリアを有する言わばエリートであり、日曜日には息子を連れて乗馬を楽しむという優雅な暮らしを送っていた。

二人は人生のある時期親密な交流を持ち、楊銓が志半ばにして非業の最期を遂げるまでの短い間ではあったが、「戦友」として共通の目的のために肩を並べていた。彼ら二人を結び付けたのは、中国民権保障同盟である。⁽²⁾ 結成から僅か半年余りで崩壊してしまっただけとは言え、中国民権保障同盟こそは当時一流の知識人を結集した人権擁護団体であった。楊銓はその実質的な運営者であり、準備段階から中心となって活躍していた。そして、この同盟の精神的な支柱の

一人であったのが魯迅である。

拙論では、これまでわが国では余り知られていない楊銓の歩んだ足跡を辿ることにより、祖国の現状を憂い、より良い祖国の実現のために奮起し、誠実に生き抜いた一知識人の肖像をまず描き出したい。そしてさらに、魯迅と楊銓の中国民権保障同盟における活動・交流の分析を通して、この二人に通底する、知識人として誇りと責任、民族に寄せる彼らの「思い」を明らかにしようと考えている。こうした作業を通して、中国知識人の特質の一端に触れることができるはずである。

1. 楊銓暗殺

1933年6月18日、日曜日。朝8時ごろ、楊銓と長男楊小佛を乗せた乗用車は、当時楊銓が暮らしていた中央研究院上海分院の門を出ようとしていた。霞飛路5号の自宅で待つ妻と次男を拾ってから大西路に向かうよう、楊銓は運転手に告げ、車がいましも亜爾培路331号の中央研究院の大門を出て亜爾培路に入ろうというその時、四人の暗殺者たちのピストルが一斉に火を噴いた。楊銓は咄嗟に我が子に覆い被さり、身をもって銃撃から息子を庇った。幸い息子楊小佛は銃弾を一発腿に受けただけで済んだ。しかし、楊銓は全身に十数発の銃弾を受け、病院に運ばれてまもなく息を引き取った。胸に受けた銃弾が致命傷となった。楊銓、時に41歳。⁽³⁾

この暗殺事件は、当時の上海を震撼させ、「たちまち上海租界内にテロの空気を漲らせた」⁽⁴⁾。当時の上海では暗殺や誘拐といった事件が日常茶飯に起きていたから、国民党政府に批判的な人物が暗殺されたというだけなら、これほどまでに大きな衝撃を人々に与えることはなかった。しかし、今回の事件がこれまでになく上海の人々を恐怖に陥れたのは、それが上海租界内で起きた最初の政治的暗殺事件だったからである。しかも、ところもあろうに中央研究院上海分院前が凶行の舞台に選ばれたことは、特務側の大胆な挑戦として当時の人々に受け取られた。何故なら、亜爾培路331号の現場には、ふだんフランス租界警察の巡捕が入口に立ち番をしており、中国当局者すら本来手出しのできない租界の中でも、どこにもまして警戒の厳しい場所だったからである。中国民権保

障同盟はそれまでしばしばこの地で会合を開いているが、それもこの中央研究院上海分院が最も安全な場所と考えられていたためであった。⁽⁵⁾

暗殺した側も、その政治的効果を十分認識した上での行為であったことを認めている。かつて特務だった沈酔の記すところによれば、楊銓の日頃の行動を監視した結果、乗馬中の楊銓を「始末」するのが、最も簡単で且つ確実だと特務たちは考えていたが、蔣介石はこれに反対したと言う。蔣自身の統治区域内で事件が起これば後々厄介だという考えも彼の脳裏にはあったが、それにもまして、租界内で実行してこそ威嚇効果が大きく、特務の力を誇示するには最適だと考えたためである。⁽⁶⁾

では、そもそも何故楊銓は殺されなければならなかったのであろうか。当時から、様々な理由が取り沙汰された。曰く、宋慶齡・蔡元培に対する威嚇。⁽⁷⁾曰く、魯迅に対する威嚇。⁽⁸⁾曰く、楊銓が丁玲失踪に当局が関与している証拠を公表したことへの報復。⁽⁹⁾さらには、胡適除名に対する当局の報復という説を主張した者もいた。⁽¹⁰⁾

こうした様々な噂が飛び交ったことから事件の反響の大きさが窺えるが、宋慶齡・蔡元培に対する威嚇というのが本当のところであろう。「同盟」がまがりなりにも活動を続けてこられたのは、何と言っても宋慶齡・蔡元培という大物の存在のお陰であった。さしもの国民党当局も、この二人には迂闊に手出しできなかった。このことは暗殺者側の沈酔自身が認めている。彼によれば、蔣介石が楊銓暗殺を決定した主要な動機は、楊の暗殺によって宋慶齡を威嚇することにあったと言う。宋慶齡・蔡元培を中心とする中国民権保障同盟は蔣介石の憎むところであったが、直接宋慶齡を（そして、恐らく蔡元培の場合も同様であろうが）暗殺することは影響が大きすぎた。そこで、誰か「適当な」別の人物を殺して、宋慶齡を威嚇することにしたのであった。「同盟」成立以来、楊銓は執行委員兼総幹事として積極的に活動しており、1933年の春には、華北等において「同盟」の活動の意義を説き、蔣介石の人権無視の振舞いを鋭く糾弾していた。彼はまた、内戦停止・一致抗日を強く主張してもいた。つまり、楊銓は、標的として申し分のない人物だったのである。⁽¹¹⁾

元来、「同盟」を実質的に切り盛りしていたのは、楊銓であった。彼は優れた

実務能力に恵まれ、¹²その能力を遺憾なく発揮し、裏方として「同盟」を支えてきたのである。鄒韜奮の伝えるところでは、決議案の実際的な執行は専ら楊銓に委ねられ、楊もまた熱意をもってこれに取り組んでいたという。¹³こうした事実から考えても、「同盟」を潰そうとする側にとって楊銓に勝る「獲物」はなく、むしろ当然の選択であったと言えるだろう。しかも、蔡元培の住居の真ん前、宋慶齡の住居から数百メートルと離れていない場所での暗殺であったから、威嚇効果は抜群と彼らが考えたのも無理からぬことである。だからこそ、楊銓暗殺に間接的に関わり、後に特務機関「軍統」の「特務教育班」教官となった沈醉が、「行動術」（逮捕・暗殺・誘拐など）のテキスト編纂にあたって、この事件を模範的暗殺として取り上げ、特務機関の「傑出した作品」と自画自賛して止まらなかったのである。¹⁴

では、殺された楊銓とは、一体いかなる人物であったのか。度重なる脅迫にも屈せず、国民党の抱き込み工作をもはねつけ、断乎として「同盟」を守り抜こうとして凶弾に斃れた楊銓。彼の一生を我々も顧みてみることにしよう。そこに我々は、魯迅との共通項を見い出しうるであろう。

2. 楊銓小伝

楊銓は、1893年（光緒19年）、江西省玉山县に生まれた。¹⁵字は杏佛、衡甫。原籍は江西省清江県である。官吏であった父に伴われ、幼児期を揚州に送り、6歳で私塾に入る。彼が13歳のとき、父が失職し、その後しばらく一家は貧窮のうちに日を送った。

1908年、15歳になった楊銓は、上海に出て中国公学に入学している。中国公学は、1905年11月に発布された「清国人ヲ入学セシムル公私立学校ニ関スル規程」、所謂「清国留学生取締規則」に反対して帰国した元日本留学生たちが、資金を集めて1906年に開いた学校である。因みに、後に楊銓が批判するにいたる友人の胡適は開校の年に中国公学に入学している。¹⁶

卒業後、楊銓は清朝の腐敗に憤激して革命運動に身を投じ、1911年には中国革命同盟会に加入した。辛亥革命後、彼は南京臨時政府総統府秘書処・収発組に配属され、公文書の受入れや発送に従事した。この職場で、のちに中国科学

社を共に組織する任鴻雋と知り合っている。

1912年、唐紹儀を総理とする南北統一政府成立にあたって、臨時政府秘書処内では、袁世凱の下で官途に就くことを潔しとせず、職を捨てて海外に留学しようとするものが多く現れた⁽¹⁷⁾。この留学案は、時の教育総長蔡元培、臨時大總統孫文の承認を得ることができ、稽勲局によって多くの秘書処職員が海外に派遣される運びとなった⁽¹⁸⁾。楊銓もその一人に選ばれ、外国の有用な学術を学び祖国建設に将来貢献すべく、アメリカに旅立ったのである。

渡米した楊銓は、コーネル大学の機械工学科に入学した。このコーネル大学在籍中、中国科学社の前身である《科学》雑誌社創設に参加することになる。1914年の第一次世界大戦の勃発は、当時アメリカに留学していた中国人留学生に大きな刺激を与え、科学技術の研究と普及を図らなければ、中国を強大な、外国からの侵略を受けることのない国にすることはできないと痛感させた。1914年6月10日夜、楊銓、趙元任、任鴻雋、胡適ら十数人のハーバード大、コーネル大の留学生は、任鴻雋の宿舎に集まり、《科学》月刊の創刊を決意した。かくして、翌1915年1月、《科学》雑誌は創刊され、ついで同年10月、ニューヨーク州イサカ (Ithaca) で、中国科学社が設立された。その主要な任務は出版物の刊行にあり、「社章」の第一条でも「刊行雑誌、伝播科学、提倡研究」と謳っている⁽¹⁹⁾。楊銓は、この《科学》雑誌の創刊以来の総編輯（編集長）であった。組織のまとめ役としての能力を、彼はこの頃すでに発揮しはじめたようである。

創刊当初の《科学》雑誌はアメリカで編集されたのち、上海に送られ発行されていた。やがて中国科学社の主要メンバーの卒業帰国にともない、編集部も上海に移った。楊銓は一時期編集業務から離れたものの、1919年から21年までは再び《科学》雑誌の編集に従事し、1919年から22年までは幹事も務めている。この《科学》雑誌の総編輯（編集長）は専任ではなかったから、留学中は勉学の傍ら編集業務のために奔走しなければならなかったし、帰国後も仕事の傍ら編集に当たらなければならなかった。それゆえ、その苦勞は並大抵のものではなかった。

大変なのは編集業務だけではなかった。《科学》の発行経費は中国科学社が

負担しており、社員の納める出資金が頼りであった。しかし、とりわけ創刊まもない頃の社員はそのほとんどが貧しい留学生であったから、生活費を切り詰めて発行を維持しようとしても限度があった。そこで、1918年中国科学社は募金活動を展開することになり、社員たちはそれぞれ募金に奔走したが、この時中国科学社からの依頼で募金に協力したのが、当時北京大学校長だった蔡元培と、教育総長范源廉の二人であった。教育界におけるこの二人の名望に期待しての依頼であったが、この折、蔡元培は誰にもまして募金活動に協力した。そればかりか、政府にも積極的に働きかけ楊銓らを支援した。蔡元培のこうした助力に対して、『科学』雑誌の編集実務の責任者として発行経費の捻出に苦勞していた楊銓が深く感謝の念を抱いたであらうことは想像に難くない。のちに楊銓が中華民国大学院や中央研究院、中国民権保障同盟で蔡元培の右腕として活躍する素地はこうして形作られていったのであるが、これについては稿を改めて書くこととし、ここではこれ以上深入りはしない。

さて、楊銓はコーネル大学卒業後、さらにハーバード大学ビジネススクールに入学してマネジメントを学び、商学博士の学位を授けられた。1918年半ばに帰国した彼は、漢冶萍煤鉄公司の「成本会計科長」に迎えられたが、まもなく実業界を去り、1919年には南京高等師範学校教授に転じた。1921年、南京に東南大学が創設されると、その工科教授となり、ついで学部長にあたる工学院院長に就任した。彼がまだ三十歳前後のことである。しかし、学長の郭秉文と反りが合わず、1924年夏工学院が廃止されるのを機に職を辞し、上海に移る。この時おりから北上中の孫文と出会い、楊銓はその秘書となった。翌年、孫文逝去にあたっては、「総埋葬事籌備処総幹事」に任命され、同時に上海市国民党部委員をも兼任することとなった。当時まだ上海周辺は軍閥の勢力下にあったから、孫文の葬儀に関する活動も一種の秘密工作であった。

1925年、五・三十事件が起こると、楊銓は《民族日報》を創刊し、時の北京政府の軟弱な態度を激しく攻撃し、帝国主義諸国に対する非妥協的な姿勢を貫いた。そのため、《民族日報》は創刊後まもなく上海当局から発行を禁止されたが（6月10日創刊、6月25日停刊）、のちに触れる上海事変の際の行動といい、今回の行動といい、楊銓の積極果敢な民族主義者としての一面をよく表してい

る。

この同じ年、彼は中国済難会に発起人の一人として加わっている。中国済難会は、中国共産党の指導の下、1925年9月に上海で創設された大衆団体であり、不法に逮捕された革命運動家の救済およびその家族に対する経済援助を主要な任務としていた。彼はこの団体で、中国共産党員の憚代英らとともに上海總會審査委員の任にあった。第一次国共合作中とは言え、彼がのちに中国民権保障同盟を通じて多くの共産党員救済に奔走したことを考え合わせると、この事実は何かしら暗示的である。彼がどういう経緯で済難会に参加するに至ったのかは未だ詳らかにしないものの、後年の政治犯救済活動に先立って、この時期すでにこうした活動に深い関心を寄せていたことが窺われよう。

その後の北伐期間中、楊銓は上海方面の国民党の革命工作に当たっていたが、やがて北伐が勝利のうちに終わると、上海特別市党部執行委員兼宣伝部長、国民党上海政治分会委員に挙げられ、国民党中堅幹部としての地位を確固たるものにした。しかし、彼はそれに安住することなく、1927年10月、「中華民国大学院」という民国の新たな教育行政機関の誕生とともに、その教育行政処主任に転じた。翌28年には、新たに設けられた大学院副院長に抜擢され、院長の蔡元培の片腕として大学院運営の重責を担うにいたる。この時、楊銓の心中には、中国科学社時代以来の蔡元培の恩義に報いたいという気持ちがあったのかもしれない。ほどなくその先進性ゆえか大学院は廃止されてしまったが、この折、楊銓は蔡元培と進退をともにしている。彼は、国民政府のあった南京を離れ、蔡元培に従い上海に移り、中央研究院総幹事の職務に専念することとなった。以後、1933年に暗殺されるまで、彼は蔡元培を助けて中央研究院というアカデミーを中国に根付かせるために力を尽くした。⁽²⁰⁾

この中央研究院総幹事時代、彼はアグネス・スメドレーと知り合っている。スメドレーは、ドイツのフランクフルター・ツァイトゥング紙の特派員として1928年末に来華し、翌年初めに上海に来ていた。彼女と楊銓、そして楊の友人の詩人徐志摩の三人は、「よくいっしょに友だちを訪ねたり、どこか茶館やお寺などにいって、一晚をたのしくおしゃべりしてすごし」、「楊銓氏の快活で機智にとんだ会話は、(スメドレーの)人生にごくわずかしかない、にぎやかなひ

ととき」をもたらしたのであった。スメドレーに拠れば、楊銓は「学者というよりは、むしろ組織者、行政家、政治家といったタイプ」で、「自由主義者であるにもかかわらず、国民党員であった」。そして、「個人的には共産党をきらった」が、「反共テロと内戦には反対であった」。1931年5月、スメドレーが1929年に出版した彼女の自伝的小説“Daughter of Earth”の中国語訳『大地の女兒』（林宜生訳）の出版にあたって、楊銓は作品を高く評価する序文を書いたのみならず、「文章や講演でそれを一般のひとたちに紹介」したという⁽²¹⁾。

1931年の夏、楊銓は江西を旅して回り、そこでの見聞をもとに、“The Communist Situation in China”と題する報告をまとめ、当時上海で発行されていた英字紙“North China Daily News”に連載し、さらに中央研究院から刊行した。彼が何故共産党に関するこうした報告を書くことになったのかは不明だが、1931年夏と言えば、共産党の中央ソヴェト区に対する蒋介石による第三次包囲攻撃がまさに行われていた時期であるから、そのことと何らかの関連があったのかもしれない。ともあれ、エドガー・スノーが『中国の赤い星』の参考文献の一つにこの報告を挙げていることからみて⁽²²⁾、当時の共産党支配地域の実状をそれなりに的確に伝えるものであったと考えられる。

さて、1932年の一・二八事件、所謂「第一次上海事変」は、楊銓にとって人生の一つの節目であったと言えるかもしれない。「事変」が起こるや否や、孤軍奮闘を続ける十九路軍を支援するため、彼は「技術合作委員会」結成を呼びかけ、また、宋慶齡・何香凝らと「国民傷兵医院」を作り救護活動に奔走した。1927年以来の「清党」の実態や国民党内部の腐敗を目にしてきた楊銓が、蒋介石政権に対して批判的な姿勢を示しはじめるのは、この頃からである。後方工作や負傷兵の救護活動の中で彼が見たものは、死闘を続ける十九路軍將兵とそれを支援する上海の一般大衆の奮戦をよそに、政権維持のみに汲々とするがごとき蒋介石ら国民党中央の姿であった。兵士や民衆の必死の防衛戦を見殺しにしようとするような政府は、彼には許しがたい存在に思われたに相違ない。

元来、国民政府は、楊銓が親しく仕えた孫文の理想の体现のはずだった。楊銓自身も、そのために心血を注いできたのだ。ところが、その国民政府が、日本軍の侵略に抵抗し次々と斃れていく人々に救いの手をさしのべようとせず、

果が政権に及ぶことをのみ恐れて、日本との妥協に走ろうとしている。そればかりか、この期に及んでなお共産党討伐を最優先の政治課題としている。江西ソヴィエトで共産党政権がしっかりと民心を掌握し、一定の成果を上げていることを誰よりもよく知っていた楊銓が、民族の危機を救うより自党の安泰を優先する国民党に対して、次第に不満を昂じさせていったのは無理からぬことである。彼の心が国民党から離れていくにつれ、あくまで抗日の姿勢を貫いて犠牲となっていく人々に対する共感は深まっていったことであろう。そこには、政治的主張を超えた、祖国に寄せる熱い思いがあったはずである。かつて彼が中国科学社の創設に加わり、科学技術の発展を求めたのも、外国から侵略されることのない強大な祖国を求めたからであった。今また危機的状况に瀕している祖国をなんとか立て直したいと願う彼の胸中には、二十歳の頃と同じ情熱が渦巻いていたに相違ない。

この上海事変以降、楊銓は宋慶齡と行動をとともにすることが多くなっていく。1932年の夏、ヌーラン夫妻救済のために救援委員会が組織されたときも、彼は実務担当者として、主席の宋慶齡を補佐している。この時のヌーラン夫妻救済活動が中国民権保障同盟結成の契機となったことについては、すでに別稿で論じた通りである。⁽²⁾この「同盟」における実質的運営者兼スポークスマンとしての奮闘が、結果的に彼を死に追いやったのであった。しかし、彼の短い一生を振り返るとき、そこに中国知識人としての確固たる自負と強固な意志を見る思いがする。祖国存亡の危機を挽回し、民族の誇りを回復せんとする彼の素志が、「個人的には共産党を嫌っていた」自由主義者楊銓を、中国民権保障同盟という一種の愛國運動に駆り立てずにはおかなかったのである。

3. 魯迅と楊銓

魯迅と楊銓がいつごろ知り合ったのか、正確なところはよくわかっていない。宋慶齡によれば、「1927年、二人は同時に中国済難会に加入し、そののち初めて互いに知り合う機会に恵まれた」という。⁽²¹⁾しかし、彼女の回想には若干の誤りがある。楊銓は1925年の創設当時から中国済難会に関わっていたとされているのに対して、魯迅の加入は1927年秋に彼が上海に移ってからのことだからであ

る。ただ、「魯迅は上海に着いてからこの組織に加入し、何度も寄付をして、この組織の同志と連繫を保った」というから、こうした中国済難会がらみの活動を通して、二人が知り合う機会があったのは確かである。しかし、楊銓の子息小佛は、むしろ蔡元培、許寿裳、林語堂、スメドレーら両者共通の知友が、二人の橋渡しをしたのではないかと推測している。⁽²⁵⁾ いずれにせよ、二人が親しく顔を合わせるようになるのは、中国民権保障同盟成立以後のことであった。

「同盟」成立後、「普通の会合は減多に出席しない魯迅が、同盟の会議には毎回時間前に必ず席に着いていた」⁽²⁷⁾ し、総幹事たる楊銓は会合のたびに毎回報告をしていたから、この時期二人はかなり頻りに顔を合わせていた。しかも、楊銓は魯迅のためにこまやかな配慮をしていたことが伝えられている。会合の開かれることの多かった亞爾培路の中央研究院分院から住まいが遠く、且つ電話を持たない魯迅のために、楊銓はしばしば迎への自動車を差し向けているのである。⁽²⁸⁾ こうした配慮は勿論、当局から目をつけられていた魯迅の身の安全を守るためでもあった。しかし、それが単に便宜や安全確保のためだけではなかったことは明かだ。楊銓自身が迎への自動車に同乗し、直に魯迅を出迎えに行くことも再々あったということや、会合のあと楊銓自ら魯迅を自宅まで送り届けていた事実が、それを雄弁に物語っている。魯迅に親しみを感じ、なみなみならぬ尊敬の念を抱いていたからこそ、慌ただしい時間を割いてまで、自ら魯迅を送り迎えしていたはずである。彼のこうした行為は、魯迅を尊崇していた青年作家柔石を想起させる。

柔石は私と歩くとき、私を抱きかかえんばかりに近付いて歩いた。自動車や電車で轢かれて死なないようにと案じてくれたのである。……旧道徳であれ新道徳であれ、自分が損をして他人が得をするのであれば、彼はそれを選び取り、自分で担った。⁽²⁹⁾

「左聯」に属する五人の作家が逮捕処刑されたことを悼む魯迅のこの文章は、楊銓と交流のあった1933年2月に奇しくも執筆されている。魯迅は、かつて柔石に抱いたような親しみを、いま楊銓に対して感じ始めていたのではあるまいか。楊銓の息子小佛にせがまれて、魯迅が自身の写真を小佛に贈ったというエピソードは、二人の親密さを窺わせるに足る。

私も父と一緒に魯迅を送ったことがあり、そのとき私は、車中で魯迅に彼の書いた小説をねだった。すると彼は、以前出版したものはとうに手許にないし、新しい小説も書いていないからと言って、写真を一枚くれることを約束してくれた。それから何日もしないうちに、魯迅は自筆の添え書きのある半身像の写真を、父を通して私に贈ってくれたのだ。⁽³¹⁾

もちろん、魯迅と楊銓では思想的立場が異なっていたが、こと民族の命運を案ずる点においては、二人は共通の土壌に立っていたと言えるだろう。それゆえ、日本による侵略という民族の危機を敏感に感じとり、敢えて国民党を敵に回して抗日救国に立ち上がった楊銓に、魯迅が何がしかの敬意を抱いていたのは間違いない。暗殺事件の少し前、楊銓を暗殺しようとする動きがあることがすでに噂されていた頃、魯迅は次のように馮雪峰に語っている。

彼（楊先生を指す－原注）のように、もともと国民党側の人間が、共産党に同情しなければならなくなったのも、私の見るところではやはり、民族のためにはかならないのだ。……

民族のためということが、今日においてやはりまず第一だ。反動側はただ政権を維持することだけを考え、民族を売り渡したって構わないとまで思っている。しかし、我々の側は、革命を求めると同時に民族をも求めている。革命はほかでもなく民族のためなのだ。⁽³²⁾

「同盟」において楊銓は、抗日運動に参加したため逮捕された数多くの青年の救済に奔走していた。中国科学社創設の動機を想起してみても、また、五・三十事件や上海事変当時の奮闘ぶりに照らしても、彼が強烈な民族意識の持ち主であったことは明らかである。民族の救亡に力を尽くさんと立ち上がった若者を、時の政権が抑圧しようとするならば、それに断乎として抗議し、彼らの救済に努める。これが楊銓の揺るぎない信念であった。逮捕されたのが共産党員であるとかないとかいうことは、彼にとっては取るに足りない問題だったに違いない。こうした姿勢は、蔡元培にも、そして魯迅にも共通するものであった。魯迅は、楊銓の民族に寄せる熱情を確と見抜いていたと言うべきであろう。

暗殺事件の6年前の1927年、国民党による反共テロにひそかに心を痛めていた頃、楊銓は「犠牲と墜落」という詩を書いた。その詩は、次のように結ばれ

ている。

富貴や功名に
何の値打ちがあらう？
創造の犠牲となった者の墳墓にこそ、
尽きせぬ喜びがあるのだ。

人よ。もし暗黒を苦とするなら、
どうかあなた自身の身をともしびに。
自分の血と引き換えに得るものこそが、
真の光明の幸福なのだ。

同志たちよ、私は疲れた。
けれど後退はしない。
怖じけづき落伍した生ける屍の道連れとなるよりは、
傷ついた戦士たちの血溜まりのなかにこの身を横たえん。⁽³³⁾

この詩の「(民国)十六年八月二十二夜不寐作」という後書きから窺えるのは、時代の激動の中で、ともすれば動揺しがちな自らの心を奮い起こし、これから自分が歩もうとする道をもう一度確と見定めようとする、楊銓の決意である。夜も眠らずにいたのは、詩の創作に手間どったというより、来し方を振り返り、これからの自分のありようを考え続けていたからに相違あるまい。

さて、ようやく気心の知れてきたばかりの楊銓が、無残にも暗殺されたことは、魯迅に大きな衝撃を与えずにはおこななかった。暗殺のあった日、内山書店を通して凶報に接するや、魯迅は直ちに自動車を飛ばして、凶行現場に急行した。⁽³⁴⁾魯迅はつい数日前に、楊銓自身が魯迅を撮影した写真を彼から受け取ったばかりであった。⁽³⁵⁾いったいどのような気持ちで、魯迅は現場に向かったのだろうか。事件の翌日、訪ねてきた馮雪峰に魯迅はこう語っている。

彼はそのとき冷静にも、まっさきに自分の子供を守ったんだ。……動物にだって動物の本能があって、危険なときにはやはりまず幼子を助ける。子孫があってこそ、未来があるからね。……とは言うものの、あんな風に

行動するのは、やはり容易なことではないね。⁽³⁵⁾

「狂人日記」の結びの一句「子供を救え……」を持ち出すまでもなく、子供や青年は、魯迅にとって常に未来の希望を寄託する対象として意識されてきた。いまこの気高い精神を有していた年下の友人楊銓を失ったことは、魯迅にとって痛惜の極みであったに相違ない。楊銓の納棺が執り行なわれた6月20日、自らの生命の危険を顧みず魯迅が参列したのはその表れであったろう。そしてそれは同時に、楊銓を殺した相手に対する断乎とした抗議の意思表示でもあった。その日、当局は魯迅をも暗殺するつもりだという噂がしきりと囁かれ、そのため妻許広平は、なんとか魯迅の参列を思いとどまらせようとした。しかし、魯迅は聞き入れようとせず、前日来の雨が降りしきる中、友人の許寿裳と連れ立って会場の万国殯儀館に向かい出向いていった。⁽³⁷⁾ 出掛ける際、魯迅は自宅の鍵を許広平に預けている。彼は、自ら犠牲となることも辞さぬ覚悟だったのである。⁽³⁸⁾ 魯迅は、暴力で人民を沈黙させようとする当局に対して、決して彼らの思うがままにはさせぬと考えていたに違いない。

会場に到着してみると、暗殺から日も浅く、不穏なデマが飛び交っていたためもあってか、参列者は僅か数十人の寂しさであった。⁽³⁹⁾ しかも、その数の中には何人もの特務が勘定に入っていたようだ。華東区の情報工作担当の特務たちが会場に潜入して、どんな人物が葬儀に現われ、どんな発言をするかを監視し、「参列者の状況や当日語られる話の内容を、逐一蒐集して南京の蔣介石に報告していた」からである。⁽⁴⁰⁾ 許広平の心配は、まんざら杞憂とばかりは言えない状況だったのである。

告別式から帰ってきた魯迅は、その夜訪ねてきた馮雪峰にその日の模様を話している。まず、蔡元培と宋慶齡の決然とした態度に敬服したと語り、参列して当然の人間が姿を見せなかったことに苛立ちをあらわにした。

こういう時には、人間がわかるね。林語堂は来なかったよ。実際のところ、彼が告別式にやってきて何の危険があるもんか！⁽⁴¹⁾

林語堂は、楊銓の同僚であり、前年来の様々な政治犯救援活動や「同盟」での活動での同志である。それなのに姿を見せなかったと、魯迅は憤っていたわけである。しかし、林を責めるのはいささか酷である。たしかに、6月20日の

式に林語堂は参列しなかったが、告別式、追悼式にあたるものは実は2回行われており、7月2日に行われた棺を墓地に送る儀式には彼も参列しているからである。こちらの方は、首相にあたる行政院院長も代理出席ながら参列し、政府の高官も居並ぶ公式の葬儀であり、参列者も二百人余りにのぼった⁽⁴⁾。もっとも、この日の葬儀は、言わば政府公認の「安全」な葬儀であり、誰が参列したとて何の危険もないものであった。因みに、この7月2日の葬儀には、魯迅は参列していない。楊銓を屠った側の連中と席を同じくすることを、彼は潔しとしなかったのかもしれない。

さて、どんな事情があったにせよ、6月20日に姿を見せなかったことは事実であり、魯迅の怒りももっともではある。その日たまたま林語堂から打油詩創作を催促する手紙を受け取った魯迅は、その手紙を見て、ますます荷立ちを募らせたことだろう。その夜、魯迅は次のような林語堂宛ての返信を認めている。

先のお手紙で、打油詩を作れとのことでありましたが、今もってできておりません。思うに、打油詩を作るには打油詩に相応しい心境がなくてはなりません。しかるに今はどうでしょう。重圧がひしひしと迫り、息もつけない有様で、呻吟するか叫び声をあげるかするほかに、いったい何ができるでしょうか。⁽⁵⁾

「同盟」における同志楊銓を失った今、打油詩などという戯れ歌をどうして作れようか。次々と襲いかかってくる政治的圧迫は、もはや魯迅に言語遊戯にうつつを抜かしていることを許さないまでになっていたのである。万国殯儀館で楊銓を見送ったばかりのこの日の魯迅は、我が身を取り巻く状況の厳しさを改めて感じていたことであろう。しかし、そうした厳しい状況であったにもかかわらず、魯迅は鳴りを潜めて危機をやり過ごすのではなく、これまで通りの生活を続けることによって、断じて屈服はしないという姿勢を敵に示した。馮雪峰は次のように書いている。

楊杏佛先生が暗殺された当時、魯迅先生が示されていたあの落ち着いた態度は、彼自身犠牲となる覚悟を抱いていたことを表わしていただけでなく、彼が一種の自信を有していたことをも表わしていたように思う。すなわち、敵が凶暴になればなるほど、我々はいっそう強靱になる——これが

緊迫した決定的局面において敵に打ち勝つ唯一の方法なのだ。⁽¹¹⁾

楊銓は、彼自身が詩に記したごとく、我が身をともしびとして、真の光明を目指し戦って斃れた。しかし、たじろくことなく毅然としてその一生を全うした楊銓の強靱な精神は、魯迅の胸にしっかりと刻みつけられたと言えるであろう。

おわりに

楊銓の納棺から戻ったあと、魯迅は旧詩を一首作り、楊銓を追悼した。

豈有豪情似旧時
 花開花落兩由之
 何期淚灑江南雨
 又爲斯民哭健兒⁽¹²⁾

かつてのような豪情壮志は今ではもう失せ、人の生き死に・世の転変にも心動かされることはあるまいと思っていた。ところがどうだろう。降りそそぐ江南の雨のように涙がしきりと溢れてこようとは……。今また、苦しみもがく民族のために奔走していた同志楊銓を凶弾に奪われ、私はただ慟哭するばかりである。

魯迅はこれまでも、数多くの友人や青年の死を見送ってきた。そして、その流血の重みにじっと耐え続けてきた。かつて魯迅は、左聯の機関誌『前哨』第一期（紀念戦死者専号）のために執筆した、「中国無産階級革命文学和前駆的血」、「柔石小伝」の原稿を受け取りに来た馮雪峰にこう語った。

中国民族がこれまで流してきた血は実に大きい。しかし、大部分の流血の結果はただ中国に砂漠を増やしただけで、改革の結果をもたらしたものはきわめて少ない。我々はいま、血を民族の新生のために流さなければならぬ。

一つの民族、人民の血が多く流され、人々が流血を意に介さないようになる時が来るとしたら、それは実に恐るべきことだ。しかし、流血を減らそうとするなら、末期的な反動階級に希望を抱くことはできない。革命者

は流血を免れようとするのでなく、流血の犠牲となることを恐れないと同時に自分の血の価値を大事にしなければならない。⁽¹⁶⁾

魯迅は、果てしなく続くかに思われる流血の惨事に、鈍感になるどころか、ますます鋭敏になっていたのだ。しかし、それは余りに辛いことではある。

自分の気持ちを一寸軽くすることは、時にはとても必要なことだ。忘却はまったく一つの宝だ。忘却ということがなく、人が一つ一つの事件を全て覚えていたなら、人はそれに押し潰されて死んでしまいかねない。⁽¹⁷⁾

彼のこの言葉は、おびただしい流血事件に対する沈痛な思いを、逆に正直に物語っている。「忘却は宝だ」と語る魯迅自身は、忘れたくとも忘れられないからこそ、心にまとわりつく悲哀と憤怒を詩や文に託することで、辛うじて心のバランスを保ってきたのである。楊銓を失った今も、魯迅は限りない哀しみと怒りを心に沈めておくことができなかった。このわずか二十八文字の凝縮された世界の中には、彼の深い哀惜の情が溢れている。特に、最後の「又爲斯民哭健児」という言葉は、年下の楊銓が横死したことに対する魯迅の慟哭が押しとどめようもなく噴出している感があり、胸を衝かれる。

楊銓の死の一週間ほど後、魯迅は手紙の中でこう書いている。

近頃支那式ファッションがはやり始めました。知人の中の一人は失踪、一人は暗殺されました。まだ暗殺される可き人が随分あるでしょうけれど兎角僕は生きて居ります。そうして生きて居る内には筆でそのピストルを答へるでしょう。⁽¹⁸⁾

失踪した一人とは作家の丁玲であり、暗殺された一人とは、言うまでもなく楊銓のことである。魯迅が日本語で書いたこの文章からは、楊銓の生命を奪った「支那式ファッション」に、一管の筆をもって生ある限り立ち向かっていこうとする彼の決意が感じられる。ここで彼の言う「支那式ファッション」が、国民党当局のやり口を指したものであることは、次の言葉から明らかである。

楊杏佛もまた丁玲救済に熱心な人の一人でしたが、ついに暗殺されてしまいました。私の考えでは、この事件もきつとうやむやのうちに終わるでしょう。「凶悪犯逮捕を敵に訓令」などという類いは、すべて人をたぶらかすペテンです。⁽¹⁹⁾

自ら手を下しながら、素知らぬ顔で犯人逮捕を命じて人民を欺く当局のやり口を暴露する魯迅のこの書簡からも、悲しみに呆然としているのではなく、その悲しみを敵に対する憎悪に結晶化させつつある魯迅の姿が浮かび上がってくる。敵の攻撃をやり過ごすというのではなく、敵から蒙った打撃をテコにして、さらに敵に肉薄していこうとする魯迅の粘り強い精神をそこに見る思いがする。

楊銓が暗殺されて間もない頃、楊銓が共産党員かどうか、もしそうでないなら彼と共産党の関係がいかなるものか魯迅に尋ねた日本人がいた。そのときの模様を魯迅は次のように馮雪峰に語っている。

そいつ（その日本人を指す）は、恐らくスパイだろう。私は真面目に遠慮なく答えてやった；「楊杏佛は共産党員でなかったばかりか、それどころか国民党の人間だった。今の国民党当局が、愛国者であれば即共産党だと考えて、全て消し去ろうとしていることがわかるだろう。確かに帝国主義に極めて忠実だから、君たち日本人は大いに安心し給え。」⁽³⁰⁾

こう語ったときの魯迅の口調には、感情の高ぶりが感じられたと馮雪峰は回想している。「抗日分子」と見れば、共産党員として逮捕処刑していく国民党当局と、その背後にある日本。祖国を愛し、民族の将来を案ずる魯迅は、なんともやりきれない気持ちであったに相違ない。

そもそも魯迅は、中国民権保障同盟に対して、初めから大した期待を抱いていたわけではなかった。結成まもない頃すでに、「民権保障会は多分長寿を保てないでしょう」と記しているほど悲観的な見通しを持っていた。けれども、だからといって、いい加減な態度で参加していたわけではなかった。すでに記したごとく、魯迅は毎回必ず会合に参加していたし、「しかも、事務的なことに関しては従来あまり向いていない魯迅が、自分に割り当てられた職務をいつもきちんきちんとこなしていた」のである。⁽³¹⁾もとより、無用の流血は何とか避けたいと日頃考えていた魯迅であったから、「政治犯」として逮捕された抗日活動家を僅かなりとも救済することができればと思っただけのことであろう。無論、魯迅に「同盟」に参加するよう声を掛けてくれた蔡元培に対する気遣いもそこにはあったに違いない。しかし、単にそればかりではなく、「同盟」のために献身的に活動する楊銓の姿勢に打たれたからでもあったのではあるまいか。前節

で述べたとき、魯迅に対する楊銓のこまやかな気配りを想起するにつけ、私にはそう思われてならない。

今、楊銓は暗殺され、彼の死とともに「同盟」は「いつとなく解消していった」³³。そして、後に残った魯迅の上には、政治的圧迫がますます重くのしかかってきていた。彼は以後、公の場所で講演することができなくなり、著作も時として発禁処分とされ、日常の行動を当局から厳重に監視されるようになったのである³⁴。だが、こうした厳しい状況に追い詰められても、魯迅は国民党当局と闘う姿勢を決して崩しはしなかった。すでに暗殺対象者として当局のリストに挙げられながら、魯迅がついに暗殺されることがなかった理由を、馮雪峰は逆にこの点に求めているほどである。

当時、藍衣社が魯迅先生をも暗殺しようとしながら、ついに暗殺できなかったのは、私の見るところ、魯迅先生の国内外における地位が高く、国民党側も手出ししかねるところがあったためであろう。しかし、魯迅先生には、うまく難を免れようという気持ちはさらさらなかった。そして、彼のこうした決然とした態度こそが、かえって敵に敗れて手を下しかねさせた原因の一つであったと思う³⁵。

楊銓は死に、「同盟」は失われた。しかし、この二つの「死」を乗り越えて、魯迅の戦闘精神はますます健在であった。かつて楊銓は、「同志たちよ、私は疲れた。／けれど後退はしない。／怖じけづき落伍した生ける屍の道連れとなるよりは、／傷ついた戦士たちの血溜まりのなかにこの身を横たえん。」と綴った。彼のこの言葉は、そっくりそのまま当時の魯迅の心情をも表していると言えるであろう。魯迅と楊銓は、民族という軸でしっかりと結びつけられていたのである。

注

- (1) 『魯迅』（北京魯迅博物館編；文物出版社、1976年）
- (2) 中国民権保障同盟の成立状況等については、拙論「中国民権保障同盟の成立—中国現代知識人の『民権』擁護運動」（熊本大学《文学部論叢》第31号、1990年3月発行）を参照されたい。
- (3) 楊銓暗殺の経緯に関しては、以下の資料に拠る。「楊杏佛被暗殺」（《申報》1933年6月19日版）、楊小佛「我所知道的中國民権保障同盟」、沈醉「楊杏佛・史量才被暗

殺的経過」；以上3点は『中華民国資料叢稿 中国民権保障同盟』（中国社会科学出版社、1979年、以下『資料叢稿』と略称）所収。および、井上紅梅「上海藍衣社のテロ事件」；『改造』1933年8月号。

- (4) 胡愈之・馮雪峰「談有関魯迅の一些事情」中の胡愈之の発言。：魯迅研究資料編輯部編『魯迅研究資料』1（爾雅社出版、1979年）79頁。
- (5) 前掲、楊小佛「我所知道的中国民権保障同盟」；『資料叢稿』169頁。なお、中央研究院上海分院が蔡元培・楊銓の勤務地であったという事情も無論あったであろう。
- (6) 注(3)沈醉、前掲文。
- (7) 以下の回想がこの説を採る。注(3)沈醉、前掲文。注(4)前掲、胡愈之・馮雪峰「談有関魯迅の一些事情」、馮雪峰『回憶魯迅』（人民文学出版社、1952年初版、1981年再版）93頁、周建人「略談魯迅」；前掲『魯迅研究資料』1、44～45頁、鄭韜奮「患難余生記」；『経歴』（三聯書店、1978年第二版）326頁。
- (8) 内山完造「魯迅追憶」「魯迅さん」；『魯迅の思い出』（社会思想社、1979年）117頁、297頁。内山は魯迅自身から聞いたと書いているが、魯迅自身は楊銓暗殺は宋慶齡・蔡元培に対する威嚇だったと馮雪峰に話している。前注、馮雪峰『回憶魯迅』93頁、参照のこと。
- (9) 林語堂『八十自述』（張振玉訳、徳華出版社、台北、1977年）、108頁、および、前掲、井上紅梅「上海藍衣社のテロ事件」。なお、楊銓が丁玲失踪事件に熱心に取り組んでいたことについては、スメドレーも『中国の歌ごえ』（高杉一郎訳、みすず書房、1957年、104頁）に記しているし、魯迅も書簡の中で、「楊杏佛也是熱心救丁的人之一……」と書き残している（『魯迅全集』第12巻、人民文学出版社、1981年、190頁）。
- (10) 前掲、胡愈之・馮雪峰「談有関魯迅の一些事情」中の胡愈之の発言。彼によれば、国民党を弁護するような言説ゆえに胡適が「同盟」から除名されたというニュースは国外に広く伝わり、国民党の威信が大きく傷つけられたことが背景にあるという。なお、胡適除名事件については、前掲の、拙論「中国民権保障同盟の成立—中国現代知識人の『民権』擁護運動」を参照されたい。
- (11) 注(3)沈醉、前掲文。
- (12) 林語堂は「楊杏佛實在有一目十行、雙管齊下的天才、可以一面跟你談話、一面揮毫不停的寫信」（『記蔡子民先生』；孫常煒編『蔡元培先生全集』、台湾商務印書館、1968年初版、1977年第二版、1471頁）と楊銓の面影を伝えている。また、蔡元培もその実務能力を高く買っていた。
- (13) 前掲「患難余生記」；『経歴』325～6頁。
- (14) 注(3)沈醉、前掲文。因みに、事件後逃げ遅れて自殺をはかったものの、死に切れずに逮捕された暗殺者の一人・過得誠は、真相を自白するのを防ぐためその日のうちに別の特務によって毒殺された。ところが、特務機関の指導者・戴笠はのちに、任務達成後自ら命を絶った「美談」の主人公に過得誠を仕立て上げ、特務訓練班の学生たちに対する「精神講話」に利用した。そればかりか、重慶の道路の一つのちに「過得誠路」と命名して顕彰してさえている。
- (15) 伝記的事項の記述にあたっては、以下の資料を参照した。楊小佛「我所知道的中国民権保障同盟」（前掲）、楊小佛「紀念魯迅和他同時代的人」（『魯迅誕辰百年紀念集』、湖南人民出版社、1981年）、林語堂「記蔡子民先生」（前掲）、アグネス・スメドレー『中国の歌ごえ』（前掲）、陶英恵『蔡元培年譜・上』（台湾中央研究院近代史研究所、1976年）、李立明『中国現代六百作家小伝』（波文書局、1975年、香港）、劉紹唐主編『民国人物小伝』第一冊（伝記文学出版社、1975年、台北）、Howard

- L.Boorman ed ; *Biographical Dictionary of Republican China* (Columbia University Press, 1967~1971, Newyork).
- 06 胡適「四十自述」；曹伯言選編『胡適自伝』（黃山書社、1986年）、52頁。
- 07 吳玉章「武昌起義前後到二次革命」；『辛亥革命回憶錄』第一集（文史資料出版社、1981年第三刷）121頁。
- 08 任鴻雋「記南京臨時政府總統府秘書處及其他」；前掲『辛亥革命回憶錄』第一集、413頁。
- 09 趙孟祥「現代科学的播種者—《科学》雜誌」；『出版史料』1987年第1期、39頁。なお、《科学》雜誌は、1915年に創刊され1950年に停刊されるまで36年の長きにわたって発行された、「中国現代出版史上最も長く出版が続けられ、最も大きな影響力を持った科学雑誌」（趙孟祥論文、38頁）である。中国科学社に関する記述にあたっては、この趙孟祥論文から多くを教えられた。
- 20 林語堂は前掲の「記蔡子民先生」において、「那（中央研究院を指す—引用者注）是楊杏佛實際負責辦理院務」と記している。
- 21 楊銓とスメドレーに関わる引用箇所はすべて、前掲のアグネス・スメドレー『中国の歌ごえ』、103~105頁に拠る。因みに、楊銓は序文の中で、「この『大地の娘』は婦人運動の最前衛を行くのみではなくてまた最近の革命文学の第一流の作品である」と称えている。尾崎秀美訳『女—人大地を行く』（“Daughter of Earth”の日本語版）、酣燈社、1951年、330頁。
- 22 例えば、スノーは注の中で、「南京で国民党系科学院の賛助によって出版された楊銓著『中国における共産党の状況』を特に参照」などと記している。（エドガー・スノー『増補決定版 中国の赤い星』；松岡洋子訳、筑摩書房、1975年、335頁）。
- 23 スーラン夫妻救援活動や「同盟」の設立経過、「同盟」における彼の活動等については、拙稿「中国民権保障同盟の成立」（前掲）を参照されたい。
- 24 宋慶齡「追憶魯迅先生」；『魯迅回憶錄』一集（上海文芸出版社、1978年）、1頁。
- 25 許広平『「党的—名小兵」』；『魯迅回想錄』（松井博光訳、筑摩書房、1968年初版）、199頁。
- 26 前掲、楊小佛「我所知道的中国民権保障同盟」；『資料叢稿』176頁。
- 27 郁達夫「回憶魯迅」；『回憶魯迅及其他』（宇宙風社、1940年）、18頁。
- 28 前掲、胡愈之・馮雪峰「談有關魯迅的一些事情」；『魯迅研究資料』1、79頁。また、鄭韜奮「患難余生記」に、「毎回参加していたのは、蔡先生、孫夫人（宋慶齡）、彼女の英文秘書スメドレー女史、魯迅、林語堂、楊杏佛、胡愈之諸先生で、私も末席を汚していた。」とある（『経歴』325頁）。
- 29 孔敏中「憶魯迅在民権保障同盟的活動」；『資料叢稿』155~156頁。
- 30 魯迅「為了忘却的記念」；『南腔北調集』所收；『魯迅全集』第4巻、483頁。1933年2月7—8日執筆。
- 31 前掲、楊小佛「我所知道的中国民権保障同盟」；『資料叢稿』170頁。
- 32 前掲、馮雪峰『回憶魯迅』、108頁。
- 33 楊銓「犧牲与墮落」；1927年8月22日、『現代評論』原載。引用は、倪墨炎「楊銓的一首詩」（『現代文藝散記』、上海三聯書店、1992年、40~42頁）所引に拠る。
- 34 内山完造「魯迅先生追憶」「魯迅追憶」「魯迅さん」；いずれも、前掲『魯迅の思い出』所收。
- 35 魯迅日記の6月12日の項に、「得楊杏佛信并我之照相一枚、夜復。」とある。『魯迅全集』第15巻、84頁。

- 36 前掲、馮雪峰『回憶魯迅』、108頁。
- 37 許寿裳『亡友魯迅印象記』（人民文学出版社、1977年）84頁。なお、魯迅の数少ない親友の一人許寿裳は、当時中央研究院文書処主任の職にあった。彼は蔡元培からの電報で事件を知り、善後策を協議するため、中央研究院の他の何人かの幹部とともに南京から上海に駆けつけていた。楊銓とは中華民国大学院以来の同僚であり、この日は万国殯儀館に行くつもりで、まず魯迅宅に立ち寄ったものであろう。因みに、許寿裳の日記に拠れば、彼は6月19、20日の項に、それぞれ「不能睡」「不能寐」と記しており、楊銓暗殺のショックの大きさを窺わせる。「友誼的記録—許寿裳日記中の魯迅」（陳漱渝『魯迅史実求真錄』、湖南文芸出版社、1987年、108頁）を参照。
- 38 前掲、許広平『『党的一名小兵』：『魯迅回想錄』、194頁。
- 39 前掲、鄭紹奮『患難余生記』：『経歴』、327頁。なお、1993年6月21日付《申報》に拠れば、参列者は百余人である。『資料叢稿』、121頁。
- 40 沈醉、前掲文：『資料叢稿』141頁。
- 41 前掲、馮雪峰『回憶魯迅』、110頁。
- 42 「楊杏佛安葬」（『申報』1933年7月3日付の記事）に参列者の一人として、林語堂の名も上がっている。『資料叢稿』125頁。
- 43 魯迅の1933年6月20日付け林語堂宛て書簡。『魯迅全集』第12巻、187頁。
- 44 前掲、馮雪峰『回憶魯迅』、92～93頁。
- 45 『魯迅全集』第七巻、443頁。なお、解釈にあたっては、高田淳『魯迅詩話』（中央公論社、1971年）、周振甫『魯迅詩歌注（修訂本）』（浙江人民出版社、1980年）、王永培・呉岫光編『魯迅旧詩彙釈（下）』（陝西人民出版社、1985年）等を参照した。
- 46 前掲、馮雪峰『回憶魯迅』、90頁。
- 47 前掲、馮雪峰『回憶魯迅』、95頁。
- 48 魯迅の1933年6月25日付け山本初枝宛て書簡。『魯迅全集』第13巻、523頁。
- 49 魯迅の1933年6月26日付け王志之宛て書簡。『魯迅全集』第12巻、190～191頁。
- 50 前掲、馮雪峰『回憶魯迅』、92頁。
- 51 魯迅の1933年2月12日付け台静農宛て書簡。『魯迅全集』第12巻、150頁。
- 52 前掲、郁達夫『回憶魯迅』：『回憶魯迅及其他』、18～19頁。
- 53 前掲、内山完造『魯迅追懐』：『魯迅の思い出』、118頁。
- 54 許広平『魯迅的生活之二』：『許広平憶魯迅』（広東人民出版社、1979年）444頁。
- 55 前掲、馮雪峰『回憶魯迅』、94頁。

完